

科学技術コミュニケーション推進事業機関活動支援型
平成 27 年度採択企画
実施報告書

1. 企画名

インクルーシブキャンプ

2. 提案機関名

一般社団法人アカデミーキャンプ

3. 提案企画の概要

バリアフリー技術・ユニバーサルデザイン・ロボット工学・ICT・看護医療等を専攻する大学生・大学院生と、視覚・聴覚に障害を持つ若者たち、およびいわゆる健常者の中学・高校生が同居する(インクルーシブな)環境にて共同生活を体験するキャンプを開催する。科学技術は、障害者といわゆる健常者の間の心理的距離や物理的障壁をどのように低減し得るか。また、共同生活においてコミュニケーションを深めることによって、科学技術への理解促進や課題発見は実現され得るのか。複数の分野の専門家によって実施されるワークショップで構成されるキャンプを通じて、障害者といわゆる健常者が共生する場を科学的なアプローチで創造する。

(変更内容：視覚・聴覚をもつ中高生をキャンプに招聘することは困難なため、年齢の範囲を拡げた。)

4. 企画の特徴

[企画全体の特徴]

・ 視覚・聴覚障害者、かつ中高生を対象とした科学技術コミュニケーション活動を実施する試みは、独自性が強くかつチャレンジングなものであると考える。

・ 日常生活では盲学校・聾学校のように健常者から離れた環境にいる障害者の中高生が、最先端の科学技術を体験できるとともに、同世代の健常者とコミュニケーションを取れる機会があるとすれば貴重だと考える。(変更内容：企画としては障害を持つ参加対象として中高生を含むが、年齢層は拡げたため仮定形とした。)

- ・ 討論会やシンポジウムなど「コミュニケーションを敢えて行う場」ではなく、否応なくコミュニケーションが必要される共同生活の場を創造することで、濃密かつ本音に基づいた意見や考えが表明されると考える。

- ・ 現在の中高生が社会に出る 2020 年に開催される東京パラリンピックという舞台を意識させることによって、グローバルな視点でインクルーシブ環境を目指す視点が生まれると考える。

- ・ 企画立案を大学生が主体的に推進する仕組みを作ることで、インクルーシブな環境づくりの即戦力となる人材育成に貢献できると考える。

- ・ キャンプ中、大学生は講師役のみならず、中高生のリーダーとして共同生活に参加することで、安全管理とともにコミュニケーションを促進するファシリテーターの役割も果たす。

[実施プログラムの特徴]

- ・ 視覚障害・聴覚障害への正しい理解を健常者の中高生に促すため、大学生による視覚・聴覚についてのワークショップを実施する。(変更内容：当該ワークショップの担当は医療系ではなくバリアフリーを研究領域とする大学生が行う。)

- ・ 東京パラリンピックを意識させる仕掛けとして、また健常者の障害者に対する偏見を解消させるため、障害者スポーツ体験を実施する。この体験を通じて、研ぎ澄まされた五感の凄さを知ることで、人体という生物学的な科学への興味・関心を引き起こすきっかけとする。

- ・ 視覚障害・聴覚障害をサポートする科学技術として、バリアフリー技術・ユニバーサルデザイン・ロボット工学・IT 端末等を体験できるワークショップを実施する。共同生活の中で何らかの不自由や課題を感じているであろう健常者・障害者それぞれにとって、その有効性や利便性を実感として認識できる場になる。

- ・ キャンプの総括として、健常者と障害者が合同で「インクルーシブサイエンス宣言(仮称)」を発表し、インクルーシブな環境をもたらす科学技術の可能性とコミュニケーションの重要性を、全国に発信する。

5. 総合所見

概ね目標とする成果が得られた。

学生がリードするかたちでインクルーシブキャンプが実施され、参加者に気づきを与えることができた点は評価できる。しかしながら、予定していた参加者を集めることと、予定していた回数のキャンプを実施することなど計画通りにできなかった点は残念であ

る。今後、主担当者の変更にも対応できる組織体制の構築が必要である。また、今回検証できなかった聴覚障害に対するインクルーシブ活動の実現を期待したい。

6. 実施者からPR・感想について

一般社団法人アカデミーキャンプでは、2016年3月12・13日の週末、小学校高学年から高校生までのいわゆる健常者、および視覚・聴覚障がいを持つ人々を対象として、福島県・会津にて『インクルーシブキャンプ ～「見えない」「聞こえない」を科学する』を開催しました。「心のバリアフリー」をテーマとするこのキャンプでは、目隠しして会場を探検したのち、目が見えない人にも伝わるための地図をつくったり、耳が聞こえない人が髪の毛で音を感じることができるデバイス ONTENNA を付けてリズム楽曲を演奏したり、障がいをもつ人々もそうでない人々もいっしょに楽しめる新しい「超人スポーツ」をみんなで創造することを通して、誰もがわけへだてなく楽しさや幸福を追求できる「インクルーシブ」な環境づくりを考えました。参加者からは「体験してみて、障がいを持つ人がどのように感じているのかがよく分かった」といった声が聴かれ、また、子どもたちが急速に障がいを持つ人々と溶け込んでいく様子を見て、キャンプを運営する立場からも多くの発見がありました。



目隠ししてボールをパスするゲームを模索中



作った会場の地図に触れてもらう

以上